

大阪府におけるハママツナの分布状況

楠瀬 雄三¹⁾・長谷川 匡弘²⁾・村上 健太郎³⁾

A rare plant species recorded in Osaka Prefecture: *Suaeda maritima* (L.) Dumort.

Yuzo KUSUNOSE¹⁾, Masahiro HASEGAWA²⁾ and Kentaro MURAKAMI³⁾

Abstract: *Suaeda maritima* (L.) Dumort. was newly recorded from two localities in Osaka Prefecture, Japan: a natural beach along the reclaimed land at Fuke, Misaki-cho, Sennan-gun and an artificial beach at Rinku park, Sennan City.

大阪府において、これまで記録されていないハママツナの生育地を2つの地区で確認した。本種 *Suaeda maritima* (L.) Dumort. (ヒコ科: APG III) は海岸砂地に生える一年草で、本州 (宮城県以南)、四国、九州、沖縄に分布する (佐竹ほか 1982)。大阪府では絶滅危惧 I 類に指定されているほか、分布が確認されている府県のうち、19 府県で絶滅危惧種に指定され、京都府では絶滅したとされている (<http://www.jpnrdb.com/>, 日本レッドデータブック検索システム, 2015 年 12 月 20 日参照) など、保全の必要性の高い種である。そこで、新産地に加えて大阪府における分布状況について報告する。

確認されたのは泉佐野市りんくう公園内の内海と呼ばれる人工海浜と、泉南郡岬町深日の海岸近くの塩湿地である (図 1)。2014 年 11 月 17 日にりんくう公園の内海でハママツナを確認した。ハママツナは内海の西側の汀線付近に約 5 × 5 m 程度の面積でカーペット状の群落を形成していた (図 2)。ここには、ハママツナ以外の海岸植物は少なく、わずかにハマヒルガオやツル

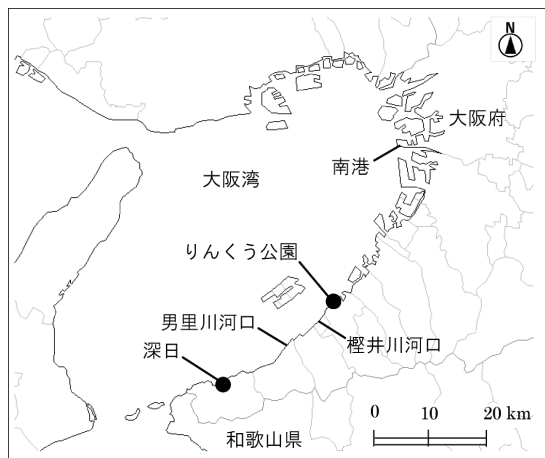


図 1. 確認位置図。

Contributions from the Natural History Museum, Kishiwada City, No. 26 (Received December 23, 2015)

1) エコシステムリサーチ研究員/きしわだ自然資料館専門員

Researcher of Ecosystem Research/ Associate Researcher of the Natural History Museum, Kishiwada City

エコシステムリサーチ 〒781-0113 高知県高知市種崎 362/きしわだ自然資料館 〒596-0072 大阪府岸和田市堺町 6-5

Ecosystem Research 362 Tanezaki, Kochi, 781-0113 Japan/ Natural History Museum, Kishiwada City 6-5 Sakaimachi, Kishiwada, Osaka, 596-0072 Japan

2) 大阪市立自然史博物館学芸員 Curator of the Osaka Museum of Natural History

大阪市立自然史博物館 〒546-0034 大阪府大阪市東住吉区長居公園 1-23

Osaka Museum of Natural History 1-23 Nagai Park, Higashi-Sumiyoshi-ku, Osaka, 546-0034 Japan

3) 名古屋産業大学環境情報ビジネス学部准教授 Associate Professor, Faculty of Environment and Information Management, Nagoya Sangyo University

名古屋産業大学 〒488-8711 愛知県尾張旭市新居町山の田 3255-5

Nagoya Sangyo University 3255-5 Arai-cho-yamanota, Owari-asahi, Aichi, 488-8711 Japan



図2. りんくう公園内海におけるハママツナ。A：開花個体，B：生育状況

ナ、タイトゴメが石積み護岸の周囲に散生しているのみであった。管理者への聞き取りの結果、内海は海砂を敷いて造成されたとのことであった。ハママツナは海流によって種子散布される可能性が指摘されている（鎌田・小倉，2006）ことから、投入された砂中にハママツナの種子が混入していた可能性のほか、内海と外海での海水の交換時に種子が漂着して、定着した可能性が考えられる。

一方、深日では2015年11月18日に本種を確認した。ハママツナは塩湿地の東側の汀線に付近に約 5×5 mの群落を形成し、その周囲に複数の個体が散生していた（図3）。ここには、ハママツナのほかにハマサジ、ホソバハマアカザ、アキノミチヤナギなどの塩湿地生の植物が混生しており、小規模ながら良好な状態で塩湿地植生が維持されていた。過去の空中写真をみると、2002年以前は自然海浜であったが、この時点で既に海浜の前面の埋立てが始まっており、2008年には埋立地で囲まれていた。ここも外海と海水の交換がされているので、種子散布によって定着した可能性のほか、過去、自然海浜であったことから、その当時の個体群が残存している可能性も考えられる。

桑島（1990）によると、ハママツナは大阪府内の榎井川と男里川に分布するとある。その分布履歴について詳しく知るため、大阪市立自然史博物館所蔵の標本を調べたところ、田尻町（現泉南市）榎井川で1949年に、住吉区南港で1958年に、1996年に阪南町（現阪南市）男里川で採集されている。これらの地区では、男里川を除くと、現在では生育を確認できないことから絶滅したと考えられる。現在のところ大阪府では、ハママツナは今回確認された2つの地区と男里川河口の計3つの地区にのみ分布していることになる。りんくう公園については、管理者へハママツナの希少性を伝え、随時、観察してもらうように依頼した。しかし、本種は一年草であることから、台風などによる攪乱や踏圧によるストレスによって群落が急激に衰退する可能性がある。また、深日の塩湿地については、法的な保護対策の対象となっていないことから、群落の維持が担保されているわけではなく、その存在が十分に知らされないまま開発によって消失

する可能性がある。このような絶滅のリスクを軽減するには、生育地のモニタリングに加えて、生育地を分散させることが望ましいと考えられる。大阪府では、せんなん里海公園に人工礫浜が造成されており、ハマサジやホソバハマアカザ、アキノミチヤナギが自然に定着している。海浜上の礫は、ハママツナの種子の定着を促す役割を果たす可能性が指摘されている(鎌田・小倉, 2002) ほか、ハママツナは埋土種子集団を形成する(Hutchings & Russell, 1989) ことから、この礫浜はハママツナの継続した生育地として機能する可能性が十分にあると考えられる。大阪府におけるハママツナの希少性を考慮すれば、このような生育に適した行政の管理地に移植することで、積極的に保全を進めていくことが望まれる。

なお、両地区の緯度・経度は、りんくう公園内海: N 34.41250, E 135.29439, 深日の塩湿地: N 34.32574, E 135.14913 である。



図3. 深日の塩湿地におけるハママツナの生育状況

証拠標本

大阪府泉南市りんくう公園, 2014 年 11 月 17 日(楠瀬雄三, MBK); 大阪府泉南郡岬町深日, 2015 年 11 月 18 日(長谷川匡弘, OSA)

謝 辞

深日のハママツナ生育地について情報を提供していただいた田代 貢氏(大阪市立自然史博物館友の会評議員)に御礼申し上げます。

引用文献

- Hutchings, M. J. & Russell, P. J., 1989. The seed regeneration dynamics of an emergent salt marsh. *Journal of Ecology*, 77(3): 615-637.
 鎌田磨人・小倉洋平, 2006. 那賀川汽水域における塩性湿地植物群落のハビタット評価. *応用生態工学*, 8(2): 245-261.
 桑島正二, 1990. 大阪府植物目録 197pp. 近畿植物同好会, 大阪
 佐竹義輔・大井次三郎・北村弘一郎・亘理俊次・富成忠夫(編), 1982. 日本の野生植物, 草本 II, 離弁花類 604pp. 平凡社, 東京